

経済の意味

——現代経済のエピステモロジーを求めて——

永安幸正

目次

- 一、経済への問い
 - (一) より良い人生と経済のかかわり
 - (二) 経済の道
- 二、経済学における方法問題
 - (一) 地図の支配力
 - (二) 方法論争の意味するもの
- 三、経済意味論のいろいろ
 - (一) ことばの由来
 - (二) 古典から近代へ
 - (三) 現代経済学の見方
 - 富と希少性と交換と——

経済の意味

(一) より良い人生と経済のかかわり

人類の世界史は、数知れない大衆一人ひとりによる日々の小さな努力と、その複雑な相互作用の積み重ねで進んで行く。世界をまたにかけて行動する巨大な多国籍企業のふるまいといえども、一人ひとりのビジネスマンの行動の集積である。人はみな、生きることに精一杯である。日々好日、あるいは悲喜こもごもである。

朝起きて大急ぎで身支度をし、通勤の電車に走る人あり。暑い日にセールスに回る人あり。
工場で無心に機械の組み立てに没頭する人あり。快適な冷房や暖房のきいたルームでコンピュータを駆使して
仕事する人あり。

田畑で汗と土にまみれながら耕す人あり。
株や土地の投機に血眼になっている人間あり。

働くとは「はたを楽にすることなり」という悟りあり。

「ご飯粒は菩薩なり」と駅弁の蓋の飯粒を、一つ一つていねいに食べる人あり。惜し気もなく捨て去る人あり。
自動車の窓から、空きカンをポイと道端に放り投げる人あり。

ガソリンを撒き散らす大型車を乗り回す人あり。乾き切った大地を、裸足で薪ひろいにさまよう人あり。太っ
た体を痩せさせるためダイエットに苦しみ、スポーツ・クラブに通う人あり。

子供の教育費が高くなり、「サバイバル」のために母親が勤めに出るようになった家庭あり。夫婦が共稼ぎに出
て、両親が子供の教育をほったらかしにする家庭あり。

祖先世代が造ってくれた石造りの豪華な都市やビルの修繕費がかさんで、負担にたえられず、弱っている子孫
世代あり。

乏しいなかから「おふせ」と、社会に献金する人あり。

日本では、ひところの「重厚長大から軽薄短小へ」の次に、「美・感・遊・創」といったキャッチフレーズがは
やってきた。現代は、「あそびがしごとになる」時代であり、みんなが貴族のように優雅な生活を楽しむことがで
きるという意味で、「一億総貴族化」の時代ともいえる。昔は、外国旅行などはごく一部のものの特権であった。

今は、すべての人々が「ホモルーテンス」(遊戯人)となる。たしかに、世は豊饒の時代である。

がしかし、地球上では、大多数の人類が、来る日も来る日も、さまざまに、人間みな生きる焦りや楽しみや苦
しみを重ねている。南の国々を旅行するとよい。二宮尊徳がいましめたように、人間は三日とは食いだめ出来な
いから、だれも自分の口すぎのために、働かなければならないようになっていく。形ある者は壊れるからである。
人類は、欠乏と過剰の弁証法を逃れることはできないのである。

歴史上には、マックス・ウェーバーが述べたように、時折、大衆の精神を内面から変革し、歴史の流れを大き
く転軸するような人物が現れた。そして、それらの人達は、必ずなんらかの意味で経済(くらし)について発言
し、深い影響を残した。その最たるものは古代宗教の開祖たちであった。宗教と経済は関係が濃い。

インド亜大陸で、二千数百年のむかし、シャカ族の王家に、後にブツダと尊ばれるようになる人物が、この地
上に現れた。今はネパールの一部になっていてルンピニと呼ばれるところ。その小さな王城に生をうけたもの
の、妻子と別れ王子の位をすてて出家し、やがてカースト制にとらわれない新たな悟りへの生き方を説いたと伝
えられる。

ブツダはいう、

「この(体)は、食べなければ生きて行くことができない。食物は心胸を静かならしめるものではない。食物
は身体を存続させるためのものである。そのことを知って、托鉢の行をおこなえ。」⁽¹⁾

体と精神との二分法がここにある。食物は、精神の向上にはかわりないものとされているのであろうか。必
要な栄養をとることが心を安定させ向上させることに役立つということは、考えられていなかったのであろうか。
現代の仏教徒は、シャカとおなじように考えているのであろうか。悟りと経済の関係の問題がここにある。

またキリストは、二千年のむかし、次のように教えた。

「人はパンのみにて生きるあたわず、神の口より出ずることばによるなり」⁽²⁾

さらに、次のようにも説いた。

「何を食い、何を飲まん」と生命のことを思い煩い、何を着んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣にまさるならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず、しかるに汝らの天の父は、これを養いたまう。……

またなにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合はいかにして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。……まず神の国と神の義を求めよ、さらばすべてこれらの物は汝らに加えられるべし。この故に、あすのことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は、一日にて足れり」⁽³⁾

これは、有名な教えである。だが、人類は本当に明日のことを「思い煩う」必要はないのであろうか。そもそも「思い煩う」とはどういうことであらうか。明日のため、来年のために、将来のために、自分や他の人のために、物金を蓄え、工夫をこらし、労力を注ぐことは必要なのか。蛇のそそのかしに乗り神の禁止を破ってリンゴの味の味を知り、エデンの園を追われ、罰として額に汗して働かねばならなくなったというアダムとイヴは、明日の生活のために働かなくてもよいのだろうか。

キリストの死後、キリストの弟子を自認するパウロは、アラブからギリシヤの地方に住むユダヤの人々、さらには異邦人に、次のように生きることをすすめた。

「値なしに人のパンを食せず」

「人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき」

「静かに業をなして己のパンを食せんことを」⁽⁴⁾

「貧しきものに分け与えうるために、手づから働きて善き業をなせ」⁽⁵⁾

これは人の物を盗むなどという言葉のあとに続いて述べられている言葉である。あるものを得るには、対価を出しなくてはならない。交換経済の支配する今では当たり前である。対価を払うか、あるいは働くという形でか、値を出すことをせよ、というわけである。当時、「働く」とはいかなることであつたらうか。それは今とおなじであらうか。

孔子、その語録「論語」においてのたまわく、

「士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、未だ與に議るに足らず」

「千乗の国を導くに、事を敬して信、用を節して人を愛し、民を使うに時を以つてす」⁽⁶⁾

これは、国を支配し政治をおこなう者に向けての教えである。諸侯が「国を治めるには、事業を慎重にして信頼され、費用を節約して人々を慈しみ、人民を使役するにも適当な時節にすることだ」という意味といわれる。古代、千乗の国とは戦車千台出せる国のことで、千乗の国は周王朝のうちの諸侯の国である。天子は万乗の国であつたという。ここには軍事と経済とが密接に結びついている。

ソ連のペレストロイカも、アメリカのデタントも、無用な軍事費の重圧について耐え切れなくなったからにはじまつたともいえる。日本が重武装でなく軽武装で経済に力をそそぎ、みごとに成功したのであろう。なるほど世の中には、無駄の効用ということもあるが、イデオロギーや封じ込めという好戦的な精神に駆られた無理で意味のない無駄は、決して長続きするものではない。柔和なるものが地を継ぐ。国家も体制も、「たがため鐘は鳴る」のかを問われるのである。

〈注〉

- (1) 中村元訳『真理のことは 感興のことは』、岩波文庫、二〇一ページ。
- (2) 『聖書』マタイ四・四。『舊新約聖書』、おおむね日本聖書協会、一九七四年版の訳に依拠する。
- (3) 以上『聖書』マタイ六・二五―三四。
- (4) 以上『聖書』テサロニケ後書三・八以下。
- (5) 『聖書』エペソ四・二七。
- (6) 『論語』、岩波文庫、五五、および一九ページ。

(二) 経済の道

現代に飛ぼう。戦前、京都帝国大学の経済学教授として活躍した河上肇は、マルクス主義を奉じるようになるまえに、若くして有名な『貧乏物語』（大正六年刊）を著した。彼は次のように主張している。

「人はパンのみにて生きるものにあらず、されどまたパンなくして人は生きるものにあらずというが、この物語の全体を貫く著者の精神の一である。思うに経済問題が真に人生問題の一部となり、また経済学が真に学ぶに足るの学問となるも、全くこれがためであろう。（中略）

孔子また言わずや、朝に道を聞かば夕べに死すとも可なりと。（中略）

一部の経済学者は、いわゆる物質文明の進歩——富の増殖——をもって文明の尺度となすの傾きあれど、余はできうるだけ多数の人が道を聞くに至る事をもってのみ、真実の意味における文明の進歩と信ずる。しかも一経済学者たる自己現在の境遇に安んじ、日々富を論じ貧を論じてあえて倦むことなきゆえんのもの、かつて孟子の言えるがごとく、恒産なくして恒心あるはただ士のみよくするをなす、民のごときはすなわち恒産なくんば

困って恒心なく、いやしくも恒心なくんば放辟邪侈、ますます道に遠ざかるを免れざるに至るを信ずるがためのみである。

ラスキンの有名な句に「There is no wealth, but life.（富何者ぞただ生活あるのみ）」ということがあがるが、富なるものは人生の目的——道を聞くという人生唯一の目的、ただその目的を達するための手段としてのみ意義あるに過ぎない。しかし余が人類社会より貧乏を退治せんとすることを希望するも、ただその貧乏なるものがかくのごとく人の道を聞くの妨げとなるがためのみである。読者もしこの物語の著者を解して、飽食暖衣をもって人生の理想となすものとされずんば幸いである。」

では、河上のいう道とは何か。道を聞くとはどんなことであろうか。

現代の人は、このような言葉や主張を聞いて、どんな感想をいだくであろうか。いまさら宗教の教えでもあるまい。古代の政治哲学を持ち出しても役には立つまい。現代経済はそんな昔の考えでは運営できはしないと。

あるいは逆に、いやいや、そうではない。こうした教えを一人ひとり心に刻んで、意味のある人生に役立てねばならない。あるいは、いまさらこの物余りの時代に貧乏論でもあるまい、いまは過剰が問題であると。……さまざまな感想がありえよう。

一体、経済とは、何だろうか。そして、本当の経済とはいかにあるべきものか。経済とは、物質的な富や福祉に限られるものであろうか。生産、交換、市場、価格、貨幣、雇用、分配、高齢化社会の福祉などについての現象であろうか。

経済の意味

企業の経営は、経済問題か。工場の仕事や商店のあきないで誠実に努力しているひともあるが、土地や株式の投機に血道をあげるものどももある。サイテクなる邪道が本業をうわまわる会社もある。それでも正常な経営と

いえるのか。道はどこにあるのか。

日米構造協議 (S-I-I structural impediment initiative) は経済問題か、あるいは文化問題であるか。原子力発電とか、最近再びやかましくなった地球環境の危機も経済問題であろうか。軍拡、あるいは軍縮は、経済問題であるか。捕鯨禁止は経済問題なのか。

EC統合、ソ連東欧の変化、南北問題、経済開発、海外援助、さらには地震被災や飢饉への救援は、どんな経済的意味を含むだろうか。

また、地球をおおいつつある情報革命にはどんな経済的意味があるか。

現代は、「経済」の意味が問い直されるべきときである。ある意味では、経済のコモン・センスが、深いところから揺らいでいる。だが、いろいろな問題がどこからきているか、根源がつかめないように見える。

人類の経済の意味の揺らぎの根源は、どこにあるのだろうか。それは希少性から来していると思われる。特に人類の生命活動における二つの新たな潮流から来しているのではないか。それはやはり、一つは地球を走る「情報革命」であり、もう一つは「地球環境問題」である。いずれも新たな希少性の問題をはらんでいる。

まず情報は、人間にとっての知の希少性、不確実性の問題である。他方、地球環境は物質エネルギーの希少性の問題である。そしてその上に存在する生命系(エコシステム)における希少性が現れつつある。エコロジ的な危機は生命系の問題にほかならない。

ゆえに、これからの経済のあり方を考えるについては、特に人類の生存を左右する地球環境問題への取り組みを基本とせざるをえない。この点で、最近とみに注目されるようになった「持続的発展」(sustainable development) ⁽¹⁾ という考えは重要である。

この持続的発展とは、一言でいえば「環境資源を減少させない発展」ということである。これは、いわゆる七〇年代にはやった「ゼロ成長論」(zero-growth theory) と必ずしもおなじではないが、地球温暖化問題も含めて、議論されるべき問題点はそのさいほとんど出尽くしていた。

冒頭に引用したさまざまな宗教や思想の教えには、一貫したところがある。人間が生きるうえでどうしても避けられない、希少性という壁への対処の仕方を説くものであった。われわれ人類は今、新たな希少性問題に取り組むべき段階にいる。その視点から、経済と経済学の意味を考え直すべき、根源的な転換期にあるのである。人類は、結局は、永生を願う。経済もそれに役立つのでなければならぬのである。経済の道は、こうした希少性とのとりくみにあるのではないか。

〈注〉

(7) 河上肇『貧乏物語』岩波文庫、四〇五ページ。

(8) 持続的発展 (sustainable development) については、*World Commission on Environment and Development, Our Common Future*, Oxford University Press, 1987.

大来佐武郎監修『地球の未来を守るために』福武書店、一九八七年。「持続的開発とは、天然資源の開発、投資の方向、技術開発の方向付け、制度改革がすべて一つにまとまり、現在及び将来の人間の欲求と願望を満たす能力を高めるように変化していく過程を言う」(六九―七〇へ

1ジ)とされる。この邦訳ではdevelopmentに「開発」という日本語が当てられているけれども、「発展」とする方が、より適確であろう。開発というと発展途上国の開発といった意味合いが強い。しかし問題は発展途上国だけではない。従来のタイプの工業化における先進国の経済の方向転換も求められる。地球全体の経済の在り方が問題なのである。

二、経済学における方法問題

(一) 地図の支配力

ところが、おおよそ人間の社会にかんする学問のうち、経済学ほどイデオロギーの対立の激しい領域はなかったといつてよい。思想とか価値観が、食うか食われるかという厳しい現実の選択や運営に、直接かかわるからである。だが問題は、その思想の質にある。

ジョン・メイナード・ケインズは、『雇用、利子および貨幣の一般理論』（一九三六年）によって著名であるが、次のように警告したこともよく知られている。

「どのような知的影響にもまったく支配されていないと自ら信じている実家たちも、過去の経済学者たちの奴隷であるのが常である。権力の座にあって天の声を聞くという狂人たちも、過去のある三文学者から自分で、著しく誇張されていると思う。もちろん、思想の浸透は即刻ではなく、いくらか時間がかかる。なぜなら、経済および政治の哲学の分野においては、二十五ないし三十歳以後において新しい理論によって影響される人は多くはなく、したがって官僚にしても政治家にしても、また扇動家さえも、現代の出来事に対して適用する思想は最新のそれではないからである。しかしおそかれ早かれ、良かれ悪かれ、危険となるものは既得権益ではなく、思想のほうである。」⁽⁹⁾

八〇年代末からやかましくなった日本とアメリカの構造協議では、土地とか補助金、その他さまざまな既得権が非難されている。だが、ケインズは観念とか思想のほうがかもつと根本的な作用を孕むというわけである。たし

かにそうであろう。なぜなら、非難される既得権も、何が既得権かという観念のいかんにより、既得権であるかそうでないかが、変わって来るからである。

われわれの観念、思考は、いかに過去のそれに囚われやすいものか。だが、その囚われを反省する意味で助けになる一つの方法がある。思想と理論の歴史を顧みることが、それである。そもそも、経済とはなにか、という自明のようなことにも、意見の対立は避けられない。

ジョン・メイナードは、方法論の著作は遺さなかった。けれども、ちょうどこのメイナードの父にあたるのがジョン・ネヴィル・ケインズであって、優れた方法論書を書いている。題して『経済学の範囲と方法』⁽¹⁰⁾という。彼はこう言っている。

「方法に関する抽象的な議論は、ある人たちにとっては主としてアカデミックな関心事であろう。なぜなら、その議論は経済現象についてのわれわれの知識を直接広げるものではないからである。……ある科学の範囲と方法というものは、その学習の出発点においては決して十分に論じることができない。」(P. 12)

方法論自体の議論とは、たしかにへんてこなものである。しかし、経済学も近代の一科学としては、もう二百年を超える長い歴史を重ねている。だから、いわゆるベルナルのいう「巨人の肩に立つ」の謂ではないが、われわれはもろもろの先人の業績を恵みとしてその歴史のうえに立ち、方法論を展望しても良いであろう。ゲーテのひそみにならば、「ある学問とは何か、それはその学問の歴史そのものである」ともいえるので、初期時代からの経済学の歴史を抜きには、経済学とは何かを言えない。その点、経済学もかなりの歴史を累積して来ているのである。

経済学も例外ではないが、おおよそ学問とか理論というものは、いわば大地に対する地図の関係にあるといえよ

う。地図というものは、何を示す地図か、それを必要とする人の関心方向に応じて、その種類が異なる。それが学問とか科学における異なる領域、ジャンルということであろう。

この点は、マックス・ウェーバーが適確に論じたところである。われわれは複雑多様な現実を前に、関心方向（利害関心、価値関心、意味関心）に応じて、現実のある次元（位相）を概念的に抽象し抜き出すという。これが分析・抽象という頭の使い方、知的操作であり、それにより特定の学問・科学の領域が構成されるわけである。ひとつの石ころをとってみよう。それを鉄とか、ケイ素とかアルミとかの化学成分に分解してみるときは、それは化学の見方になる。しかし、それを宝石として、あるいは旅の土産品として幾らで売ることが出来るか、というような問いを立てると、それはたちまち経済学の見方の、全部ではないにしても一部——市場経済論のテーマ——になる。売り買いではなくとも、その石ころが人間のいろいろな用途に向くとして、いずれに当てるかを選択するのも、経済問題であり、経済学の課題となる。

また、たとえば、時刻表についている地図にはおもしろい意味がある。それは、大地の地理のすべてを表すのではなく、駅と駅の関係を正確に告げるのであり、距離とか東西南北という方角などは表示されない。ところが、道路地図は、道路の距離、方角、さらに沿道のカソリン・スタンド、山川、そのほかドライブに役立つ情報が盛りだくさん入っている。これは、それぞれの必要・関心に応じて、現実（地）から特定の次元（位相）を抜き出すことを意味する。

ある学問において、それが何を対象にしているか、すべきか、ということ自体をめぐって論争が起きるといえるのは、「これは何の地図か」を問うことに等しい。それは認識の連続性としてまったく当たり前であり、正常である。「何もいままさ」と、多少奇異な感がしないでもないが、経済学では、いままさといつてすませないところ

に、長い因縁があるわけである。

〈注〉

⑨ John Meynard Keynes, *General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, *Collected Works*, Cambridge University Press, 1936. 塩野谷裕一訳、東洋経済新報社、三二六ページ。

⑩ John Neville Keynes, *The Scope and Method of Economic Science*, 1890. Reprinted by Augustus M. Kelley Publishers, 1986. なお、日本にも農村経営や商家の経営道とか藩政の指針などの伝統的な経済論には優れたものが多いが、そうした土着のものでなく近代西洋流の経済論がどのような雰囲気の中で、またどのような意味合いにおいて、明治初期日本に導入せられたかは、近

代化論としても注目される。

その導入の先駆けの一つは慶応大学の創立者、福沢諭吉翁に見出すことが出来るが、福沢の『西洋事情』などにより、「ほとんど万人にとってなじみのない科目であった」経済学が平易な形で日本人を啓蒙するところとなり、やがて自由主義と保護主義との対立をも生む次第となる。そのような経緯について詳しくは、杉山忠平教授の『明治啓蒙期の経済思想——福沢諭吉を中心に』法政大学出版部、一九八六年、参照。また、経済学史学会編『日本の経済学——日本人の経済的思惟の軌跡』東洋経済新報社、一九八四年、も参照。

(二) 方法論争の意味するもの

おそらく、医学の研究とか医療にたずさわる人たちは、あらためて医学とは何かについて論争をしたりすることは少ない筈である。かつて東京大学の医学部問題に端を発し一九六〇年代末に燃え盛った東大紛争でも、医学とは何か、議論されたことはされたが、それは医学の使命や医療に携わるものの使命、組織についてであって、そもそも医学とは何か、前提となるその対象そのものの意味がまったく変わったということではなく、対象は自明

であった。医学部や病院の建物が、何をするところか分からないとか、観点を変えればまったく意味の違ったものになるという議論は、なかったように記憶している。

医学が人間の誕生、健康増進、生命の維持増進、老化の受容までを核心とし、社会装置まで包含した同心円的な研究領域であることは、誰の目にも自明であろう。近代西洋医学とは異なる思考の伝統に立つ、東洋医学ないしは中医 (Chinese medicine) でもそれは同じである。

これまで筆者も、自然科学の領域であるエコロジーとか農学の諸領域などに少々関係して来たものだが、そこではこういう対象についての意味的論争は、まず聞いたことがない。たまたま、農学原論というようなタイトルで議論されているものは見掛けるが、そのような問いを立てるのは少数の人々であろう。

ただそうはいっても、最近はいよいよバイオ・テクノロジーの発展で、工場野菜が作られる時代であり、何が農業か、したがって何が農学かが、分からなくなりつつある。土を離れる農業という実践が起こる時代である(小林茂「農業が土を離れるとき」成文堂、参照。これは、ハイポニカ農法などの意味をさぐり、土地の生命的、エコロジー的、経済的意味を突っ込んで考察している)。

人間はつねに今を乗り越えることにより、生存していく。いわば、否定の発現としての「ゆらぎ」を通じてのみ前進するように、運命づけられているのであろうか。それをこそ創造というのであろうか。

自然科学の先端部分のポスターレス化はますます驚くに当たらないが、経済学でも、自明の対象をもつという共通理解は、容易に成り立たないでいる。

筆者などは、経営者相手のセミナーなどで、「経済学をやっております」というと、「さぞサイテックではもうかるとでしょう」とかなんとか言われることもある。そんなときは、まったく面食らってしまう。なるほど、サイテックなどは一時の幻想であり、ババ抜きゲームであるが、それでもサイテックはやりの時代ではある。資本主義の信用段階、資本が商品になるという段階の現れなのか。

筆者のように、そういう方面にはまったく無能である一介の経済学者としては、恐れ入るほかない。尋ねる方としては真剣で、理論と実践とについて、どうなっているのかというわけであろうが、理論と実践にもいろんな意味合いがありうるのだ。

そういうしだいで、これまで経済学とは、何を対象にする学問か、対象である経済とは何か、という問いが繰り返し発せられた。経済学という学問においては、細かな点をめぐる論争ではなく、「経済学とは何か」というそのこと自体をめぐって、歴史上幾度か著名な「方法論争」(Methodenstreit, methodological controversy) というものが起こったのである。すなわち、ドイツのシュモラー対オーストリアのメンガー、ドイツのウェーバーと他の歴史学派の人々(クニース、ゾンバルトなど)、マルクス学派の人々内部、マルクス派と反マルクス派、最近ではイギリスとアメリカの両方のケンブリッジの間の「資本論争」、ケインジアンと、反ケインジアン諸派、マネタリストとの論争などがそれである。

論争には、研究対象では一致していても、手法が帰納か演繹かという点に相違があるという場合もあった(シュモラー対メンガー)。けれども、根本的に重大なのは、その論争にどう答えるかにより、経済学なるものの研究領域が意味的に異なったものとなり、この学問の政治的、政策的、実践的な役割が大きく左右されるときである。それは、研究対象そのものの違いをめぐる論争のときである。⁽¹⁾

いわば、おなじ山にどのように登るかではなく、山に登るのか、海に漕ぎ出すのかの違いである。あれは山か、山でないか、にさえ意見が分かれるのである。一寸法師の乗った「おわん」は、舟なのか、舟でないのか、とい

う論争のようなものである。

方法論争には、政治的なかわりもある。従来、経済学に強大な勢力をもっていたマルクス主義唯物論への批判というイデオロギー問題——価値という概念は労働価値を中心にしてのみ認める立場と、それへの反論など——もある。あるいは、福祉国家のあり方にも大きく影を落としてきたが、「効用は異なる人々のあいだで比較できない」とみて、所得移転政策を批判するというような問題もある。

また他方には、物質的功利主義に対する宗教とか倫理学などから発する批判も影響している。「ホモ・エコノミクスはエコノミック・アニマルだ」という批判がそれである。これはとんでもない誤解なのであるが、そうした誤解を引き出すゆえんが、経済学の議論のどこかに潜むことは否定できないだろう。

こうしてみると、実践的な学問である経済学では、やはり「経済学とは何か」という問いを避けて進むことは出来ないわけである。いわば、そのように経済とは何か、したがって経済学とは何かを問うこと自体が、ひとつの社会的価値判断として経済の現実に含まれる、という関係にあるとすらいえる。経済についての社会的な観念、知的体系も経済の「現実」に内包される要素である。社会的観念も現実なのである。

〈注〉

(1)かつて、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに、ライオネル・ロビンズという教授がいた。豊かさの中の貧困に着眼したケンブリッジ大学のケインズと同じ世代に属する、一九三〇年代に、こうした混乱にある経済の

様々な意味づけについて考察し、知識界にすくなからぬ影響を及ぼした人である。彼の主張には、違った個人の効用は相互に比較出来ない、といういわゆる厚生経済学批判を含み、所得移転政策の理論的再検討などを求める

保守的なところもあった。それは厳しすぎる批判だが、ともかくさまざまな経済の考えを検討したことでは、今でも価値を失っておらず、古典の位置についている。それについては Lionel Robbins, *The Nature and Significance of Economic Science*, Macmillan Co. Limited, 1937. 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社、一九五七年。

ロビンズの学説の今日的な意味は、なかんずく「希少

性」(scarcity)という一つの根本原理からすべての経済問題を整理する見方にある。現在、人類は地球環境問題が提起する「宇宙船地球号の絶対的希少性」を自覚すべき時代に入った。ロビンズの希少性への問いは、人類の経済の本質を理解するために、根源的な問題の在りかを伝えていると思う。われわれは、現代の物あまりの現象を静かに反省してみると、その底にある「地球の希少性」という無気味な現実思い到るのである。

三、経済意味論のいろいろ

(一) ことばの由来

ロビンズ自身の希少性論は、別の機会に詳しく論じよう。今回は、経済とは何かについての、さまざまな意味論を参照していこう。まず、ことばの歴史を顧みよう。ことばというものは、ひとつの記号である。記号中の記号といってもよいくらいである。記号は人々の観念を表現するものである。ゆえに、記号としてのことばの由来つまり語源は、一般に人々が昔からいってきた経済についての観念を物語るのである。

西洋では、「エコノミー」(economy)とは「オイコス・ノモス」(oikos nomos)つまり「家政」ということばがあった。といっても、現代のサラリーマンの小さな家計ではない。どちらかといえば、むしろ古代の大地主とか中世の封建領主のような大きな単位の家政の場合である。ともかくそのような家の暮らし——生産から分配消費、軍事、政務、使用人のとりまとめまでの一切——を取り仕切ることであった。オイコス・ノモスは領主の経

済から小さな農民や職人、商家の暮らしまで含むものであった。

二千五百年むかしのアテネの哲学者アリストテレスは、息をする財産である奴隷と、土地や鋤や鍬というような物とからなる財産とを管理することをもって、経済としていた。奴隷は生きた財産なのであった（『政治学』）。そのころは、面白いことに、海賊が立派なビジネスとされた。他所の国に行つて物を略奪をしてくることも榮譽あることとされた位である。

また、欧米語での「エコノミー」には、節約のほかに、物事の性質、本質、仕組みその調和とか秩序、という意味合いもある。たとえば「自然のエコノミー」(the economy of nature)、「真理のエコノミー」(the economy of truth)、「人間の身体内部のエコノミー」(one's internal economy) などという表現もある。だから、精神分析などの心理学領域では「心のエコノミー」という表現も成り立つわけである。

概念と哲学の国ドイツでは、経済（および経済学）の観念については、随分と詳しい研究がある。たとえばヴェルナー・ゾンバルト『三つの経済学』¹²⁾によると、経済 (Wirtschaft) あるいは経済すること (Wirtschaften) は、形式的な見解と、物質的な見解とに別れるとする。

第一は、形式的見解である。経済とは人間行為の合理主義的判断にかかわるものであり、「最小の費用で成果を得よ」という原則に適う行為であり、所与の目的に達するための正しい手段（手続き、方法）の選択と実行である。

その変種には、物財の調達でなく、心理的、感覚的に最大の効用余剰、享樂を目的とする、効用と費用との対置、比較にもとづく特殊計算にあるとするものがある。つまり、最小の費用で最大の満足・効用を実現するという行為が経済なのである。だがこれは、一つの誤解 (Quid pro quo) であると、ゾンバルトは批判する。

第二は、物質的見解で、これが正しいという。「物質の意味において、内容的に規定された人間活動と設備の範囲として現れる」もので、「人間の生計資料の配慮として、すなわち物財の調達（生産、移動、利用）に向けられた人間の活動」として把握する見解である。

ゾンバルトのこの書は、経済に関する言葉の詮索では内容豊富である。

また、ゾンバルトとともにドイツの社会政策学会により偉大な足跡をのこしたマックス・ウェーバーは、第一次的に欲求充足に向けられていて、かつ平和的な行為であるものを「経済行為」(Wirtschaft) とし、それ以外の形のものを「経済的な指向をもつ行為」(wirtschaftlich orientiertes Handeln) としている。典型的な経済行為には、たとえば商品の売り買いによる利潤の獲得をめざした行為がある。経済的な指向をもつ行為には、たとえばスポーツで、エネルギー消費を節約し効率的に使うように再短距離を走るといった場合などがある。軍隊でも弾薬とか兵員の経済は重大な問題となるのである。

また行為には、「経済に関係のあるもの」(oekonomisch relevant)、「経済に制約されたもの」(oekonomisch bedingte) があろう。人間のどんな行為も物を消費するから、最小限経済に関係がある。また人間のどんな行為も時間や手段が限られているから、経済に制約される行為である。宗教の寺院などは、第一の目的は人間の救済だが、それも寺院の暮らしがその活動を制約する。無い袖はふれない。

どの観点から見ても、同じ物事も違った意味をあらわす。

かたや東アジア（中国文化圏、日本、韓国など）では、経済という言葉は、「経世済民」とか「経国済民」からきており、民を救い、国家社会を秩序付けて行くことを意味した。『論語』には次のようにいう、

「丘や聞く、国を有ち家を有つ者は、寡きを思えずして均しからざるを思え、貧しきを思えずして安からざる

を思うと。蓋し、均しければ貧しきこと無く、和すれば寡きこと無く、安ければ傾くこと無し。」(季氏一六)

この意味では経済は、政治という意味を含むものでもあった。ついでに、「事業」ということばは『易教』に出てくるが、それは道(法則)にしたがってものごとを営んでいくことである。

また日本では、恩田奎『日暮硯』というような江戸時代の藩政立て直しの哲学と実践の要諦を書いたものが、今でも重要視され、企業や財政の指針になるが、そうした類いの事柄の根底には、「経済は道である」という思想がある。

語源というものは、たんなることばの詮索ではない。語源は、古来人類がどのような意味をその言葉に込めて来たかを物語るものであり、いわば時間の流れのうえで人類のたどった意味論を解説することになるのである。

〈注〉

- (1) Werner Sombart, *Die Drei Nationalökonomien*. 小 Revidierte Auflage, 1972. SS 31-32. 『世界の名著 ウェー
島島太郎監修邦訳 『三つの経済学』 雄風館書房、昭和八 年。 一〇一―一二一ページ、お
よび 『社会科学方法論』 岩波文庫、三二―三三三ページ。
- (2) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Fünftes

(二) 古典から近代へ

しかし、今日イメージされる経済学は、やはりアングロ・サクソンの伝統をひく学問である。近代になり体系的な政治経済学 (political economy) の基礎をはじめ築いたのは、一八世紀スコットランドの道徳哲学者、ア

ダム・スミス (Adam Smith) であった。その主著の題名は『諸国民の富の性質と原因に関する研究』 (*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776.) であり、ちょうどアメリカ三州独立の年に世に問われた。

それは「諸国民の富はその年々の労働の産物である」という思想の表明から始まる。その意図するところは、人類の歴史をかえりみて諸国民 (諸国家) の文明的発展を富裕 (opulence) の側面からとらえ、各国各文明が前近代的な拘束と停滞の段階から脱して、進歩と自由活動を謳歌する近代化を達成するために、その発展の仕組みを解明することにあつたといえる。それは、西洋による大航海、新世界探検から、世界支配への加速の時期にあつた。

一八世紀のスミスの経済学は、一つの企業の経営とか、領主や家計のやり繰りにとどまる経営学や家政学ではなく、それらを含み国民全体とか国家の在り方を問題にする。その意味で、スミスの体系は本来の「ポリス」の経済学、つまり「政治」経済学 (political economy) であつた。

それは、地主とか資本家、あるいは労働者といった特定の階級でなく、すべての人々の進歩と豊かさ、つまり「社会の普遍的なウエルフェア」(序説) を考察するもので、生産、労働、分業、資本、価値、市場、土地、所得分配、財政・公共経済、貿易・国際政治経済秩序論、植民論、教育論・大学論、ローマ帝国以来の欧州文明論、アメリカ植民地論などの領域を含んでいた。

その基本の学説は、次のようにいう 社会の誰もが、他人の情けを当てにせず、自由に自分の仕事に打ち込む自主独立の人間となれば、社会の富は増加し、また誰も人の領分を犯したりせず、社会には正義が守られる。社会は「みえざる手」によって導かれる。これが「自然的自由の体制」(system of natural liberty) と呼ばれる。

ここに、経済学という学問の基本的枠組みと知的性格が定められた。それはあたかも、物理学におけるニュートンの『プリンキピア』に相当する知的位置を、経済学という新興科学のパラダイム形成において占めるものであった。

けれども、偉大な体系といふものは、純粹化の衝動を秘めた後世の知的料理人の興味と分解の対象にされるのが常である。すなわちその後、スミス体系に含まれていた経済と経済学の異なる意味が分解され、異なる視点からする定義や考え方が取り出されている。このときから、経済とは何か、経済学とは何か、という問いが問われ続けられねばならなくなった。神々の争いが始まった。

先述のメイナードの父、ジョン・ネビル・ケインズは、一九世紀末の知的状況に即して、経済とは何か、したがって経済学とは何かについて、以下のように整理して述べている。これは、先に見たゾンバルトの見解と重なるところがある。

「どんな種類の行為であっても、その行為が目的を実現するのに貨幣、時間、労力の可能な限りでの最小支出をもつてするとき、その行為を共通に『経済的』(エコノミック、economic)と呼ぶ。そして『経済』(エコノミー、economy)という言葉が意味するところは、われわれの資源を思慮分別をもって使用して、最大限の純効用報酬を引き出すことにある。

しかし、これらの言葉は、特に諸目的に対する諸手段の合理的適用という意味以外にも、用いられる。すなわち一般に、政治経済学 (political economy) の著作においては、『経済学』(エコノミクス、economics) という語は実体的 (substantial) な富につける単なる形容詞として使用される。したがって『経済的』(economic) な事実とは、富にかかわる事柄と解される。経済活動 (economic activities) とは、人間の活動であって、富

の創造、獲得、蓄積に向けられるものをいう。経済的な慣習制度 (economic customs and institutions) とは、富にかかわるそれである。政治経済学あるいは経済学とは、以上の意味での経済現象にかかわる学説体系である。⁽¹⁾

これによれば、経済とは二つの意味をもつことになる。

① 「複数目的に対する諸手段の合理的配分」という意味

② 「実体的な富にかかわること」という意味

したがって、経済学という学問は、このような対象を研究するものとされているわけであり、厳密に言えば二つの経済学があることになろう。

ネヴィル・ケインズは、しかしまた、経済学は人類の社会的関係——交わり、交流、交換、組織など——の形で行われる活動の研究に起源があるとも述べている。そして、いずれにしても、最後に得られる定義よりも、そこに至るまでの議論がより重要であるともいう。

他方また、ネヴィル・ケインズと余り違わないころ、二〇世紀のはじめに世界の経済学のリーダーであったケンブリッジ大学のアルフレッド・マーシャルも、有名な定義を経済学に与えている。

「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である。それは、個人的ならびに社会的な行動のうち、福祉の物質的要件の獲得とその使用にきわめて密接に関連している側面を取り扱うものなのである。……経済学は、一面においては富の研究であるが、他の、より重要な側面においては人間の研究の一部なのである。人間の性格は、宗教的信念の影響を除くと、他のどのような影響よりも日常の仕事とそれによって獲得される物質的収入によって形成されてきたところが大きいからであり、また経済的な力は宗教的なそれとともに世界の

歴史を形成してきた二つの主要な要因であったからでもある。⁽¹⁵⁾しかし、このマーシャルの誇り高い定義は、歴史の荒波においてどこまで自己を保持しうるであろうか。

〈注〉

(15) J. N. Keynes, *Scope and Method of Political Economy*, first published in 1890. Fourth edition in 1917. (16) Alfred Marshall, *Principles of Economics*, 9th edition. 馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社、序論 Reprinted in 1986 by Augustus M. Kelley, pp.1-2. 三ツブ。

(三) 現代経済学の見方——富と希少性と交換と——

ある国の経済学が世界一流になるには、その国の現実の経済が一流にならなくてはならないと述べた経済学者がいた。二〇世紀にはいり、一九世紀のイギリスにかわってアメリカが世界の経済をリードするようになる。現代の経済学の世界的中心は、新大陸アメリカに移っている。物理などでもそうだが、ナチス・ドイツのせいで、シュンペーターのような優秀な学者が欧州からアメリカに亡命したこともある。こうしてアメリカの大学が、経済学的思考を支配している。特にその傾向は第二次大戦後から著しい。

世界的なテキスト・ブックはアメリカ製が圧倒的に流布している。二〇世紀末の時点でのアメリカ的経済学の標準的な教科書を開いてみよう。

まず、一九四八年の初版以来、世界的な名声を博し、わが国でもおそらく最大数の読者と最大級の影響力とを保持してきたポール・A・サミュエルソンの書いた『経済学』(Economics)の場合は、次のように説く。

「経済学はあらゆる種類のトピックスを取り扱うが、その核心は企業、家政、政府の行動を理解するにある。それは日常生活のあまたのパズルを解こうと試みる。……」

以下は、経済学についての若干の定義例である。

経済学は、財貨の生産と交換を含む諸活動の研究である。

経済学は、経済全体の運動の分析である。それは価格、産出、失業の動向などである。こうした現象が十分に理解されると、経済学は政策を開発し、政策によって政府は経済の成果を向上させることができる。

経済学は選択の科学である。それは人々がいかにして次の選択を行うかを研究する。希少なあるいは有限な生産的資源(土地、労働、設備、技術的知識)の使用、様々な財貨(麦、牛肉、外套、コンサート、道路、ミサイルなど)の生産、および社会のメンバーの消費のためにこれら財貨の分配である。

経済学は諸国民の間の通商の研究である。それは、なぜ各国民が財貨を輸出し、またその他の財貨を輸入するかを説明する手助けとなり、また国境で各種の障壁を設けることの影響を分析する。

経済学は、貨幣、銀行、資本、富の研究である。……

これらを融合すると、次のような共通の命題を見いだすことができる。

経済学は、いかにして一つの社会が、希少資源を使って価値ある商品を生産し、その生産物を異なるグループの間に分配するかの研究である。⁽¹⁶⁾

また、次のような定義もある。ケイスとフェアによれば、

「経済学は、人間とその社会が、自然と先行世代とが提供する希少資源の活用について、いかに選択していくかの研究である。何が生産されるか、いかに生産されるか、だれがそれを取得するか、いかなる理由に

よってか、その成果は良いか悪いか、それはいかに改善できるかを問う。」

また、日本にも知名度の高いハイルブローナーとサローのテキストによれば、

「経済理論は制約条件下での極大化行動に関するものである。」¹⁸⁾

ここには、目的、手段、資源、制約条件、希少性、選択、富、商品、価値、生産、分配というような特別な概念が現れている。富または資源、希少性、交換または市場などが共通のコンセプトとして浮かんできている。

しかし、経済学の主題は固定不変ではなく、変化していく。一般に、学問の歴史性というものが無視できない。人類の社会、経済が急速に変質していくものだからである。ゆえに経済学の内容も、歴史の変化と密接に結び付いている。そのことを、J・K・ガルブレイスは次のようにいう。

「ところが実際は、経済学の学説は常にそして密接にその時代と場所の産物なのであって、それが解釈する世界と切り離して見ることはできない。しかもその世界は変化する。世界は常に変形の過程にある。したがって、経済学の学説が意義を失わないためには、これも変化しなければならないのである。過去一〇〇年の間に、巨大法人企業、労働組合、不況と戦争、ゆたかさの増大と普及、貨幣の性質の変化ならびに中央銀行の新しい役割およびその役割の高まり、農業の役割の低下ならびにそれに対応する都市化および都市内の貧困の増大、福祉国家の台頭、政府の経済運用全般に対する責任の新たな負担、社会主義国家の出現、といったすべてのことが、現実の経済を劇的に変化させ、それに革命的と言ってよいほどの変化を与えた。経済学の対象となる事柄が変化したように、経済学の主題も変化せざるをえなかったのである。」¹⁹⁾

人類の生の営みは歴史を創造する。歴史においては一切は変化する、その変化をとおして、しっかりと歩みを作り出したいというのが人類の経済活動の願いであり、またそれを研究するのが経済学の目的であり使命である。

る。

もちろん、以上の所からでは、何が経済か、必ずしも意見は一致しないが、人類の生命活動の性質の中から、おおよそ富、希少性、交換というような点が共通に浮かんできている。現代経済では、そのような思考様式がほんやりと共通集合を形成しているといえる。つまりそこでは、物質が非物質か、物か情報か、希少か豊饒か、交換か非交換か、労働か遊びか、というような問いが、再び全面的によみがえりつつあるわけである。

そしてまた、経済とは何かについて容易に意見が一致しないように見えるのも、意味があることなのかも知れない。これは、はじめに見た人類古来の多様な問いを継承している。それに答えるには、あまりにも一元的な思考では役に立たないだろう。今人類は、新たにそのような知的装備を求められる問いの前に立たざるを得ない。さまざまな経済学説は、はからずもそれを表現しているわけであろう。知的多様性は豊饒の証拠であろう。

〈注〉

① Paul A. Samuelson and William D. Nordhaus, *Economics*, 13th edition, pp.4-5. 経済学』上下、TBSブリタニカ、一九九〇年。著者に有名なガルブレイスの三男ジェームス・ガルブレイスが加わった。

② Karl E. Case and Ray C. Fare, *Principles of Economics*, Prentice-Hall International Edition, 1989, p.4. ③ John Kenneth Galbraith, *A History of Economics*, 1987, pp.1-2. 鈴木哲太郎訳『経済学の歴史』ダイヤモンド社、一九八八年、四一五ページ。

④ Robert L. Heilbroner and Lester Thurow, *The Economic Problem*, Prentice-Hall International edition, 6th edition, 1981, p.86. このテキストは、第八版では、東欧出身のスターク教授は、早くから理論の歴史性について、練達の日本語訳が出た。中村達也訳『現代経

し、また理解されようようにすることが歴史研究者の使命である」と述べている。Werner Stark, *History of Economics in its Relation to Social Development*, 1944. 杉山忠平訳『社会発展との関連における経済学史』、未来社、一九七三年、一六ページ。

たしかに経済は、内面の思想だけでなく、外面的な姿も内的構造も変化する。ところが、経済学の議論は、交換、希少資源、あるいは物的富にかかわるという点ではおおよそ意見が同じ方向を向いているといえるが、単に理性的であるのではない。そこには人々の感情も欲望も希望も悲嘆も入り交じる。それらの歴史的变化が問題なのである。

現代の日本経済に関連していえば、問題の歴史的な変遷がよくわかる。たとえば環境問題に関連して割り箸批判がやかましくなった。ただ、それは一面的な批判であり、物事の実態を見ていないところがある。それは間伐材を利用できる。しかし今、そうした間伐ができないうに山村の山が荒れていることが、もつと根本の重大問題になっている。それは、戦後日本経済の展開と深くかわる。つまり炭焼き産業がなくなったことに一つの大きな原因がある。その裏には一九五〇年代の末から六〇年代前半にかけて進んだ、日本経済の「エネルギー革

その後、七〇年代までしばしば訪れた東南アジア農村の暮らしも印象深い。東南アジア開発に学び、また経営学、商業や工業の世界にも実際に踏み込むことが多くなり、自分の経済のイメージは一九六〇年代までの農村経済のそれから格段に変化した。それは、国内の過疎過密問題と共に、南北問題など、地球的なスケールでの貧困と豊かさ、経済発展の問題の登場である。

今この原稿を書いている筆者の脳裏に浮かぶ・・・あかぎれの走る荒れた手をさすり、傷む腰をさする農家の人びと、土地代金でやがてお荷物になる豪勢な新築家屋、小さな工場を経営していて景気の行く手を心配し夜中にうなされて起きてくる人、あるいはサイテクによってかなり含み資産を蓄積しほくほく顔の人も浮かぶ。借金に首が回らない地獄の家庭もある。かと思うと他方には塵ひとつない精密工場、大手町あたりの冷房の効いたオフィス——しかし夜はガラあきというむだな空間利用構造——のなかで快適に仕事する大企業の人達・・・。

東南アジア奥地の農村で、あるいは地方の小さい町の工場で出会った、懸命に働く若い青年達の姿も浮かぶ。それゆえ、GATTや日米構造協議といった国際経済交渉は、特に底辺の人々の日常性をぬきに、政治家や官僚や財界が独断で行ってはならない。たとえば、日本の

命」、また「都市化」による農山村からの地滑りの人口流出があったのである。四日市とか徳山の石油コンビナートの出現が、プロパンガスや都市ガスを供給し、かわりに日本の山村から新炭業を開放したのである。それが、並木正吉「農村は変わる」(石波新書)という本がベスト・セラーになったしだいでもあった。

個人的な体験を交えて考えてみると、筆者にとっては、経済の原イメージは、一九六〇年代までの農村の暮らしそのものにある。そこでは、貨幣市場経済のウエイトは大きくはなかった。野菜とか米を買う農家は、想像だにできなかった。物を買うということは、生活の中心ではなかった。売り買いは、私の個人的意識としては「幾分汚いこと」、「うさん臭いこと」、あるいは、物がなから買おうので「悲しいこと」という感じがした。今でも私は、商売(売り買い、安く仕入れて高く売る行為)への一種の懐疑がある。物やサービスを創造して行く行為でないからである。また当然、貨幣なる存在への距離感も記憶に残っている。

だからここでは、サイテクとかファッションとかいって、交換、市場、貨幣、信用・・・などの喧噪に無批判に浮かれるのではなく、その冷静な解明が必要であると考えている。

「要塞化」の原因の一つと批判される日本の都市の高すぎる地価は、多分に金融機関と組んだ企業の投機に本当の原因がある。これは現代資本主義の病理ではないのか。

なのに、アメリカからの批判の尻馬に乗って、市街地の農家に原因があるかのように責任をすり替える議論が横行している。それは浅ましい妬みの議論ではないか。農地の宅地並課税でなく、逆に宅地の農地並課税という議論は何故起こらないのか。なんでも税金により均等化平等化できるというのは、「金銭経済」にすべてを巻き込む愚かな思想である。一方では規制緩和を主張し、市場経済に一切を任せるべきだといいつつ、そうすることが他方では、ドラッカーのいわゆる「忍び寄る社会主義」(creeping socialism)を招くという皮肉がわかつていないようだ。すべて単純な政策は、意図しないで自己矛盾する結末を生み出すのである。

ゆえに、国内の複雑な利害関係を十束ひとからげにならして、たんなる抽象的、一元的な自由競争市場論のみから問題を断定してはならないのではないか。市場の成功とともに市場の失敗が論じられているのが現代経済理論のコモンセンスであるのに、構造協議などの国際経済論ではそのような論点は露ほども自覚されない。だから、ソ連東欧の激変をみて、ただちに市場経済の全面的

勝利をうたいあげる浅薄な議論が支配している。非市場への展望はなくて良いのか、多少の留保をつけたい気がするの、筆者のみの杞憂であつて欲しいものと願う。日本でも、正か邪かという単純思考好きのアメリカの論調に乗って、ソ連東欧の激変から一挙に市場メカニズムの勝利、自由主義の勝利、資本主義の勝利を叫ぶ声が高い。だが、その短慮ぶりが今に反省されるであらう。市場の失敗 (market failure) を忘れてはならない。

以上に見てきた現代までの複雑な経済論議も、それぞれに意味があるので、こうした単純思考を回避する鎮静剤にならう。問題を多次的に考察するように、多くの概念装置を用意せよ、ということである。はからずも、定義問題さえままならない経済学という学問のこみいった歴史は、かえってそうした多様な必要性に応じるための、知的表現なのかもしれない。